

日本音楽学会 2022 年度支部横断企画（第 2 期採択）
「スタイル&アイデア：作曲考」第一回作品演奏会+シンポジウム
報告記

原 罌

2022 年 12 月 24 日（土）に日本音楽学会 2022 年度支部横断企画として「スタイル&アイデア：作曲考」第一回作品演奏会+シンポジウムを開催した。報告者は、2021 年 8 月より小島広之（東日本支部）、坂本光太（西日本支部）、西村聡美（非会員）、八木友花里（非会員）とともに「スタイル&アイデア：作曲考」という団体を設立し、同時代の日本の作曲家の創作を広く一般に伝えるための活動を展開してきた。これまでに作曲家の樋口鉄平、灰街令、桑原ゆう、辻田絢菜各氏による論考やインタビュー等を Web 上に公開している。今回の支部横断企画は、桑原氏と辻田氏に委嘱した新曲を中心に構成された演奏会と、両氏と団体メンバー 5 名とのあいだで「作曲行為」をめぐる議論を行うシンポジウムとの二部からなる。

演奏会プログラムの詳細は傍聴記に譲り、以下では今回の企画の背景と趣旨を補いつつ、とくにシンポジウムのパートについて詳述したい。今回の企画に先立ち、上記団体は 2022 年 6 月 18 日に桑原ゆう、辻田絢菜両氏を招き、公開シンポジウムをオンラインで開催した。ここでは両氏に自らの創作に関するプレゼンテーションを行ってもらい、その後、来場者の質問・意見に回答していくかたちで、企画者らと作曲家で委嘱作品のテーマを共同決定した。この委嘱テーマの決定後には、作曲家と演奏家のあいだでのスケッチの交換や演奏技法・技能をめぐる打ち合わせなどが続いた。これらは作曲過程の重要な一部をなしてはいるにもかかわらず、しばしば不可視のものに留まるプロセスであるが、報告者らはこれらを積極的に記録し可能な範囲で公開することを続けてきた。

今回の支部横断企画を一つの成果とする一連の活動が拓きうる地平は、シンポジウムでの発表「作曲行為をめぐるドキュメンテーションの（不）可能性」で要約された。発表者の原は、上述した一連の取り組み——つまり論考の執筆やインタビュー、公開シンポジウムにおける聴衆を巻きこんだ議論と委嘱テーマの決定、実際の作曲の現場での演奏家と作曲家のあいだでのやりとり、そして演奏会とその後のシンポジウムといったプロセス全体——を広義の「作曲行為」と捉え、それを一種のコンセプチュアルな作品として提示することを主張した。現代の音楽作品は再演の機会も少なく、聴衆と作品との関係性のあり方はともすれば非持続的なものになりがちである。今回の企画のように長期的な視野から、その時々聴衆がその流れに触れ、コミットできる機会や仕組みを設けることで、（現代）音楽作品の受容のあり方の一つのオルタナティブを提示したい、というのが意図するところである。それは、より持続的な音楽との付き合いになる。というのも、今回の企画をめぐって、聴衆は演奏会よりも前の委嘱段階からこの「作曲行為」に介入することが可能であり、また、論考やインタビュー、シンポジウムの様子は、それに並走するだけではなく、

遡って事後的にアクセス可能であることにより、いわば遅効性を備えてもいるからだ。

加えて、原の発表では作曲家、演奏家、音楽家、マネジメント従事者、聴衆といった各々の役割を固定化することなく、それらが交差し交換される契機を呼び込むことの重要性、また、学術論文も含め音楽をめぐるテキストを織る際に、そうした複数のパースペクティブを集合させることで、新たな創造性を生むことが可能になるのではないか、という見通しも示された。続く全体討議は、議論の時間が十分ではなかったものの、提題の内容を踏まえながら作曲家や演奏家を中心に各々の視点から今回のプロジェクトに対する感触や今後の展望が語られ、さらなる議論・研究の端緒が示された。

当日は学会員に加え、非会員の来場が多くあった。年齢層も幅広く、学会員の活動や音楽学の営みを広く一般にアピールする貴重な機会となった。今回のようにレクチャーコンサートや手短なアフタートークとも違い、演奏会とシンポジウムとを合わせる形態は、音楽について熟考する機会の創出という意味で、大きな可能性を持っているだろう。

末筆ながら、ご支援を賜った日本音楽学会、並びに学会員の皆様に心より御礼申し上げます。